

# 安心して暮らせるまちづくり

## はじめに

これから10年後には10人のうち3人が65歳以上となる超高齢化社会が到来します(図-1)。

社会全体が広く分かち合い、老後の安心ある生活を支えるための動きとしては2000年から開始した介護保険制度が在ります。

しかし一方で、10年を経た今、大幅な高齢者の増加に反し、住み慣れた地域に暮らし続ける環境整備の遅れや高齢者の受入施設不足など問題点も多いのが事実です。この状況から、保険制度だけではなく、介護の視点から捉えた地域全体で支える夢アイデアを提案します。

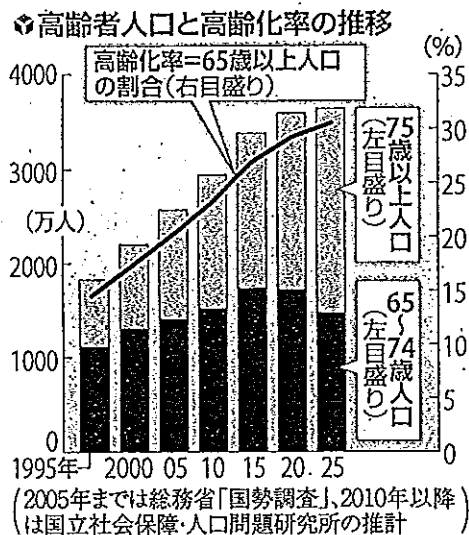


図-1

## 1 介護の現状と問題点

### 1-1 介護保険制度

介護保険制度は、7段階に分けられた介護の必要度に応じ、認定を受けた65歳以上の高齢者がサービスを受けられ、利用者負担は介護報酬の原則1割です。原資は40歳以上の国民保険料と税で半分ずつ負担しています。

### 1-2 介護保険制度の問題点

- ・ 介護が必要な団塊の世代の急増や在宅における老老介護の増加
- ・ 2025年には最大24兆円の総費用
- ・ 介護施設不足による弊害(特養ホーム待機が42万人、家庭介護と病院生活)
- ・ 担い手である介護職員不足
- ・ 高くなるサービス価格

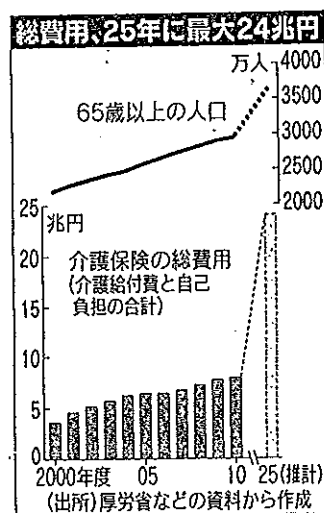
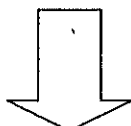


図-2

社会全体が広く分かち合うという狙いが微妙に変化

### 1-3 心配を工夫で乗り切る基本姿勢

#### (1) 社会的弱者の生活権（老いる郊外団地と山間地）

・生活環境に恵まれる市街地に比べ、高齢者比率が増加する郊外団地や地理的条件が不利な山間地では、車を運転ができなくなったために遠隔地への買い物や通院が困難になるなど（※食の砂漠、陸の孤島化）社会的弱者が増えています。

※食の砂漠:近隣商店が閉店し、遠隔地に行けず生活必需品の購入先が失われる現象

#### (2) 介護職の地位向上と異種分野との連携

・他の職種に比べ、様々な場面でを行うサービスは想像以上にリスクが大きく、賃金水準問題も絡み、離職も多いようです。また、福祉住宅の検討や医療施設との連携などがうまくいかない現実があります。介護職を人が羨む職業にしたいものです。

#### 【基本姿勢】

⇒ 「地域力」と「人材確保」という介護の支持基盤を充実させるため  
民間あるいは大学等を主体とした“新たなサポーター”の支援が必要

## 2 社会全体で支える仕組みづくり

昔何気に使われた呼びかけに「向こう三軒両隣」があります。社会全体で支える介護システムも制度の見直しばかりでなく、本来このような原点に立ち返り、ひと工夫した支援方法が効果を発揮できそうです。『誰しものが難なく介護され、誰しものが無理なく介護できる』社会が夢です。その夢を叶えるアイデアを提案します。

### 2-1 要介護を助け合いで乗り切る

#### ◇要介護者に外出機会を提供支援

・外出が困難な要介護者に対して、地域サポーターと介護の専門家及び旅行会社が提携した小旅行の企画を施せば、認知症予防と介護予防そして一番は意欲向上につながります。

#### ◇外出時の外部ケアサポート

・外出する際に気軽に入りやすいトイレを官民協働（公的施設やホテル）で標識にて案内すれば、外出意欲の増進につながります。さらに、店舗内外や公共施設に休憩目的のコーナーなどの確保が肝心です。

### 2-2 ひとり暮らしの高齢者などへの支援

#### ◇「見守りマップ」と高齢者などの生きがい創出

・交通施設や建物などハード面でのバリアフリー化に比べ、人付き合いなどソフト面でのバリアフリー化が思うように進みません。理由のひとつに「個人情報保護法」が壁になっている様子があります。厳密化すると目的内での使用も阻まれそうです。そこで考えたのが、自分たちが暮らす近所界隈で、介護支援を必要としている方を対象に様々な関わり合いを記したマップを創ることです。

関わり合う人が多いほど、密度が濃いほど効果的です（図-3）。

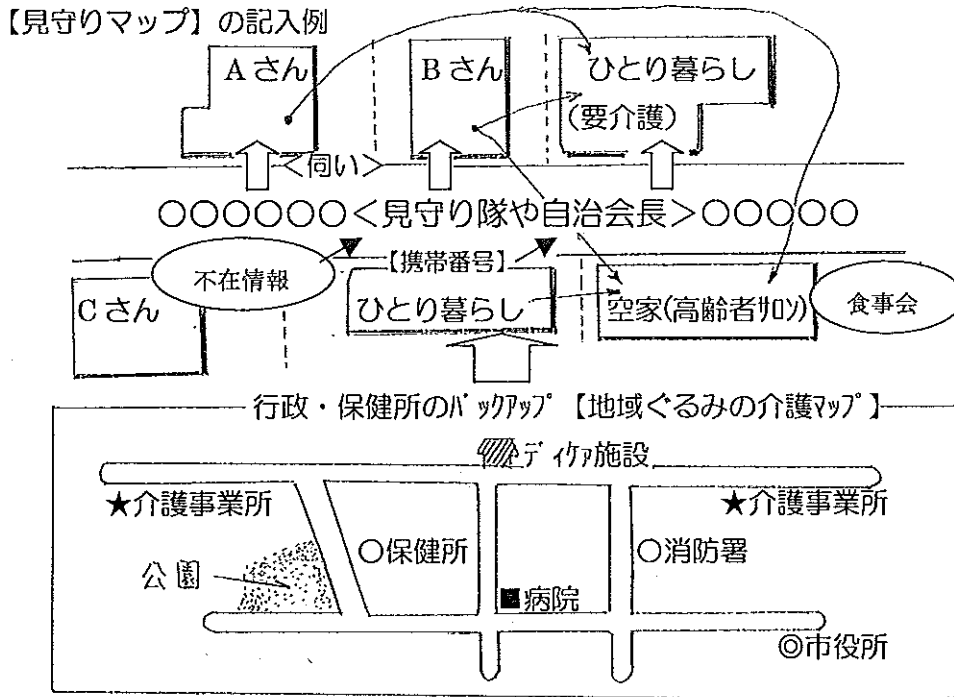


図-3 地域サポート案

最近、こうした関わり合いにボランティアグループによるネットワークづくりが盛んです。ただし助け合いに便乗した悪質な被害に不安で、ボランティアに心を開かない方も多くいます。一方で、地域には介護の現場経験者や社会福祉士など、様々な資格を持つ方もいます。こうした経験者や資格者を中心に、ボランティアの皆さんがチーム「まちの見守り隊」を組みます。

◇ 「まちの見守り隊」によるサポート

① 高齢者サロン

たとえば子育てサロンや保育所の隣に空き店舗や空き教室があれば、それを活用した「高齢者サロン」を設ければ、高齢者から生活や子育ての知恵をもらえます。さらに認知症の予防と社会貢献意識による生きがい増進効果も期待できます。

② 小学生による地域学習

課外授業の一環として、町を巡って地域の歴史や云われ及び歳時記などを知る活動を行います。

③ 郵便・新聞配達員、生協配達員による見守りネットワーク

いずれも間接的ではあるが、独り暮らしの高齢者の生活情報が自治会等に届けられ、異変の早期発見につながる見守り効果になります。

2-3 介護分野を地域の<sup>なりわい</sup>生業に

◇ 確実な地域ケア事業所の配備

- ・介護や医療サービスを中心に施設入居を待つ高齢者に対し、日常生活圏内で受けられるきめ細かい事業所を 24 時間体制で配備すれば、在宅介護も安心してできそうです。

◇介護施設による説明会（PR）

- ・介護支援にこれまで関わりの薄いと思われる異業種（文教、娯楽・レジャー）や関連業種（医療系、建設業等）に、新規または拡大参画意欲を促す説明会を開きます。
- ・子供の時代に介護の世界に触れさせ、学生時代にはホームヘルパーの資格試験に挑戦させてはいかがでしょうか。

2-4 まちづくりには市民の場づくりが必要

◇助け合いには組織づくりから始める

- ・高齢者や交通弱者が寄り集い、生き生きと暮らせる街にするには、ルールづくりより、真に助ける人になれるリーダー（見守りさん）と共に支援するボランティアチームづくりが大切です。

◇今、あるものを最大限活かす工夫

- ・今後不足する『終の棲家』には、高齢化団地の建替えや、町屋や空き店舗を大いに活用し、高齢者がお互いを招きながら、定期的な食事会や歓談会を開くと楽しさ倍増です。

おわりに

介護の視点から感じるのは、保険制度の充実には、地域社会全体で支えあう「助け合い」の環境づくりがハード・ソフト両面に必要不可欠であると言う事です。

介護を必要としている高齢者等は、個々が様々な事情をお持ちですが、共通するのは『安心して暮らせるまち』への大きな期待です。

その期待に如何に答えられるか、報いることができるか悩んでいる中に、勝手な提案をさせて頂きました。全国にはすでにこのうちいくつかは取り組まれているでしょうが、その「解」はひとつではないと思います。

介護支援や介護予防の現場は迫る超高齢化社会に確かな環境づくりを必要としています。高齢化の進んでいる日本には、取り残されてきた高齢者の街ではなく、高齢者たちが望んで集まり、人生の後半を安心して暮らせるまちづくりが必要です。

地域での共助と相まって行政や企業の方々にも、こうした悩みを受け止めていただき、ご一緒に老人から若者まで「いつまでも安心して暮らせるまちづくり」を進めていきましょう。